
とある転生の交換法則(ルールチェンジ)

エクスタシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生ルルチェンジの交換法則

【Nコード】

N0296X

【作者名】

エクスタシー

【あらすじ】

気がつけば川が流れる花畑…じゃなくて何処までも真っ白な空間に俺はいた。なんだかんだ思っていると神が出てきて転生させてくれるらしい。しかも原作ブレイクしろって！？よっしゃラッキーなんなら能力もチートにしちまえ！

~~~~お知らせ~~~~

この小説で出てきた名前と同じ名前を使っている人や同じ名前の人

がいたらすみません。

## 第一話 プロローグ(前書き)

どうもエクスタシーです。今回はインデックスです。

## 第一話 プロローグ

???? side

俺は細川拓海。企業に内定をもらえなくて就職を諦めてバイトのかたわら漫画やアニメのグッズを集めている簡単にいえばオタクだ。今日は家で禁書を読み返した後コンビニに向かっていたはずなんだが…

拓「ここは何処だー！」

何故か大きな川が流れる花畑…じゃなくて何処までも真っ白な空間に立っている。すると突然後ろから声がした。

?「お主は死んだんじゃよ」

拓「お前はd「ワシは神じゃ」ひとがしゃべってんのに間に入ってくるな！」

神「まあ、とにかくお主は死んだんじゃ。ワシのせいだな」

拓「…は?いま、なんと?」

神「じゃからワシのせいで死んだんじゃよ。わかってくれたかの?」

拓「ふ、ふ、ふざけるなー!何か?まだ恋もしていないのに死んだのか俺は!?!」

神「そういつとるじゃろが」

拓「はあ…。不幸だ…」

神「じゃがな、死んでしまったお主を生き返らせようと言うことになつたのじゃ」

拓「え！生き返るの!？」

神「うむ。しかしお主がいた世界には無理じゃ。お主は死んでしまつたからの」

拓「よっしゃー！テンプレ的展開！いくところと能力は選らばせるよ」

神「いくところは参考程度にな。能力はすきなのを選ぶと良いぞ」

拓「んじゃ早速。いくところは一番好きなどある魔術の禁書目録インデックスの学園都市。

能力は俺が考えた交換法則ルールチェンジ。当然ながら能力値はLEVEL5。超能力と魔術はどちらも使えるようにしてね。あと俺が知っている物（漫画、アニメ、ゲーム、小説等）の技は全てノーリスクで使えるように。それから魔力、霊力、気、その他は全部MAXで。あ、それと今までの記憶とこれからの記憶は全部忘れないようにしてくれたら満足かな。あ、やっぱりお願い何回でも出来るようにして。それがあればあとはいいよ。」

神「す、すごいチートじゃな…まあこんぐらいチートじゃないとあれはできぬが…」

拓「で、転生するところは決まつたの？違つところならまた変える

けど」

神「お、おう。そうじゃった。いくところはとある魔術の禁書目録インデックスのパラレルワールドじゃ。それと、条件がある。この条件をクリアしないならお主は死んでもらうしかないじゃるな」

なんだろ？まさか原作に関わるな、とか？そういうのだったらやだな

神「お主は…原作ブレイカーとして当麻さんと同じ高校に通うのじゃ！」

拓「……は？」

神「じゃから原作ブレイクしてほしいのじゃよ。ちなみにいく世界、条件共に満場一致じゃ。それとお主が行動しやすいように年齢は当麻さんと同じ高校一年生にしといたからの」

拓「り、理由は？」

神「そんなもん決まっとるじゃる。お主には言っとらんかったがいま天界とある魔術の禁書目録インデックスとある科学の超電磁砲レールガンが大流行での。知らぬ者はいらんのじゃ。」

拓「へ、へー」

神「と言つことじゃあの〜」

神がそういつと拓海の下に穴ができた。

拓「へ？つわ、つわあああー！」

## 第一話 プロローグ（後書き）

感想、指摘等はどしどし送ってください。

第二話 姫との出会い（前書き）

第二話です。

## 第二話 姫との出会い

拓海 side

拓「うわあああー！」

どうも細川拓海です。何故俺は叫んでいるのでしょうか？それは…空を飛んでいるからです

拓「と、とりあえず…ルール俺は空間転移テレポートを使う事が出来るチェンジ！」

そういうと俺は近くのデパートの屋上に転移した。

拓「ふー。助かった。ったくもう少しましな場所に転生させろっつーの」

神「(すまぬの。でも転生させるとそうなるんじゃない。なんでじゃろ？)」

拓「(うわ！びっくりさせんな！なんだどうなってんだ？)」

神「(これはお主とワシが使える念話じゃ頭で『神』と『念話』を交互に思い浮かべれば出来るからの。いい忘れておったがお主の前の名前はもう使えないからこっちで適当につけといたぞ。あと家の住所はポツケの中にある紙を見てくれよ。それじゃあの。)」

拓「(ちょっと待て！さっきの言い方、何人も転生させたみたいだったけどこの世界に他の転生者がいるのか？)」

神「いや、おらぬよ。じゃが他の世界にはおるぞ。例えばリリカルでマジカルな世界とかにな)」

拓「（そうか、わかった。じゃあな）」

よっしゃラッキー。転生者いない世界で良かった。んじゃ早速寮に行つて挨拶でもしますか。えーといまは7月15日つて明日からレールガン始まりじゃん！ま、いつか。俺の仕事は原作ブレイクなんだから。とりあえず寮いこー。

拓「ここが寮か…なんか原作より綺麗だな。まあ学園都市だかんない

えーと俺の部屋は…あつたあつた。ん？そういえばさっき神が適当に名前つけといたとか言つてたなえーとどれどれ。お、五十嵐英樹いがらし ひできかい名前だな。えーとお隣さんは…よっしゃ当麻さんだよ。ってことはその奥が土御門の部屋か。あいつ、俺にもろ介入させるきだな。ま、いいけど。挨拶しとくか。

《ピンポン》

当「はい、いま行きます。っと、あぶねー。はいはい、どちら様ですか？」

英「こんにちはは今日引越してきた五十嵐英樹です。隣の部屋なのでよろしく願います。」

当「そんなに固くならなくてもいいと思うぞ。上条当麻だ。俺のこととは当麻でいいから。とりあえず中に入れてくれ。」

英「わかった。当麻も俺のことは英樹でいい。これからよろしくな」

よし、当麻には接触できた。あとは美琴か…

英「じゃあ俺はこれで」

当「おう、じゃあ明日学校でな」

英「んー電撃姫はどこにいるのかな？とりあえずなんか飲も。」

俺は近くのコンビニに入ろうとしたが、

不良「嬢ちゃんちょっと一緒に遊んでくれない？」

そんな声が聞こえた。

英「（これはヤバイ？助けないとな）おい！そのやつその子を離せ！」

不「あん？誰だ、てめえ」

英「只のふがない高校生だ！」

不「んじやとつとと向こう行きやがれ！」

英「うるせー！」

そう言いながら俺は能力を発動させる。

英「（ルール俺は重力を自由に換えられるチェンジ！）」

不「な、なんだこれは！体が動かねえ！つてめえなにしゃがった！」

英「なに、簡単なこと。お前らの回りだけ重力を二倍にしただけだ  
！」

そんなことをいつてると電撃が飛んできて不良達を消し炭にした。

英「（あれ？俺いつ電撃放ったっけ？）まあいいか。お嬢さん大丈夫かい？」

美琴「あんた何もんよ。わたしと勝負しなさい！」

英「（うわー。やっちゃったよ。嬉しいけどもう少しましな出会い方なかったのかよ）ち、ちよつと待て。俺は五十嵐英樹。只の大力者（LEVEL4）だぞ？」

美「じゃああの能力はなによ？見たことも聞いたこともないわよ」

英「うっ！？あ、あれは、その、えーと、何て言うか」「ジャッジメントですの！」「え？」

美「く、黒子！？」

黒子「あら、通報にあった女の子と言うのはお姉様のことでしたの。それからそちらの殿方は？」

美「あ、あいつは「困ってた女の子を助けてやったんだ」女の子言うな！」

黒「そうでしたの。ですが事情を聞きたいので一度支部に来てくださいまし」

英「わかったよ。」

## 第二話 姫との出会い（後書き）

感想、指摘等はどしどし送ってください。

第三話 事情聴取（前書き）

短いです

### 第三話 事情聴取

黒子 side

どうもはじめまして。私、お姉様の露払いをしている白井黒子と申しますわ。いま通報があったのでかけつけたのですが『不良に絡まれている女の子』というのはお姉様のことでしたの。ですがお姉様と一緒にいた殿方…五十嵐英樹さんがお姉様を助けようとしたとかまあ詳しい話は支部で聞きますわ。

side out

英樹 side

あぶねー。黒子が来てくんなかったら今頃姫に追いかけてたよ。でもこれから事情聴取か…。多分大丈夫だよな、戸籍。あれ？俺罪に問われたりしないよね？まあそんなときは逃げるか。そんなこんなでいま事情聴取されてまーす。一七七支部って快適だな。

黒子「なるほど。最後はお姉様が止めをさしたと…。わかりましたわ。あなたは無罪放免でいいですわ。もう完全下校時刻まで時間がないですし。ところで、あなたの能力、えーと、交換トルチェンジ法則でしたか？どんな能力ですか？」

やばっ！姫が能力次第じゃこれから勝負よ！って顔してる。まあ、かくしてもしようがないか…

英「この能力はな、簡単に言うと俺が世の中の法則を変えることができるんだ。」

黒「どういう意味ですか？」

英「そうだな、例えば、ルール俺は風力使いエアロ（シューター）のLEVEL3であるチェンジ！って言えばほら、風」

そう言っただけ俺は風を吹かせた。

英「わかった？」

黒「すごい反則な能力ですわね」

英「まあ空間と自分以外の人には使えないんだけどな」

黒「わかりましたわ。では、今日はこれで。くれぐれも事件に巻き込まれないようにして下さいな。」

英「わかったよ。んじやな。」

美「あ！ちよつと待ちなさいあんな！」

黒「お姉様、このあとわたくしとのスキンシップをしてくださいまし！グへ、グへへへへ。お姉様とあんなことやこんなことを…」

美「黒子！放しなさい！」

英「ありがと、黒子。ルール俺は大能力者ポイント（LEVEL4）の座標マーク移動であるチェンジ！」

美「あ！こら、待ちなさい！」

誰が待つか！

## 第三話 事情聴取（後書き）

感想、指摘等はどしどし送ってください。

## 第四話 始まりの朝（前書き）

かなり強引なところがありますが勘弁してください

## 第四話 始まりの朝

英 side

英樹は今自分の部屋…の隣の当麻宅にいる。当然当麻は目覚まし時計のセットしわすれで起きてない。

英「起きろー当麻ー」

そう言いながらLEVEL2くらいの電撃を足から流す。

当「ウギャギャギャギャー」

英「やっと起きたか…」

当「…うん？英樹？普通に起こしてくれ…」

英「いやーだつて楽しいんだもん」

どうも、五十嵐英樹です。いやー今日からレールガン始まりますよ。てか、いま目の前で美琴さんが不良に絡まれていますよ。ここは気づかれないように行きたいなーなんて「あ！ちよつとあんた！待ちなさい！」…無理か。

英「何か？」

美「何か？じゃないわよ！昨日は良くも…」

英「いやーあれは…」

美「いいから勝負よ！」

英「（何か逃れる術は…！）当麻！ここは頼んだぞ！」

当「え？お、俺！？つて、あ！待て。待って下さい英樹様」

そして俺は無事逃げて当麻は犠牲になった。

英「おーここか、キレイだなー。えっと、まずは職員室職員室。」

英「失礼します。転入生の五十嵐英樹です」

小萌「はいはい。五十嵐ちゃんはこっちです」

英「（うおー！知ってはいたが本当に赤いランドセルが似合いそうだし…）どうも、転入生の五十嵐英樹です」

小「五十嵐ちゃんの担任になった月詠小萌ですー。よろしくですー。さっそくですけどせんせいが合図するまで廊下で待っててくださいー」

英「わかりました。（そつえば当麻は生きてるかな？ま、大丈夫だろ）」

小「はいはい席についてくださいーい。今日はなんと転入生が来ま

したー。しかも男の子でーす。」

それを聴いて喜ぶ女子と落ち込む男子。

小「さあ新入生ちゃん、どーぞー！」

そう言われて俺は教室に入っていく。自己紹介をしてHRが終わると恒例の質問攻め。ちなみに席は当麻の後ろだった。

ご都合主義で授業が終わり放課後、当麻達は話したいようだったが、レルガンに介入するために急いで柵川中学に向けて足を進めるが、途中の路地で誰かにぶつかってしまった。

英「すみません。」

？「いえ、こちらこそ……」

英「あ！昨日ジャッジメントの支部にいた……」

初「確か五十嵐英樹さんですよね」

英「はい。えと初春飾利さんと……」

初「私の友達の佐天涙子です」

佐「初春、誰？」

初「あ、こちら昨日御坂美琴さんを助けようとした五十嵐英樹さんです。あ！そうだ！このあと御坂さんに会いに行くんですけど一緒にどうですか？」

英「ああ、そうさせてもらおうよ」

接触完了！

## 第四話 始まりの朝（後書き）

感想、指摘等はどしどし送ってください

## 主人公紹介（前書き）

主人公紹介です。

## 主人公紹介

### 主人公説明

名前…五十嵐英樹いからし ひでき

能力…交換法則ルールチェンジ

超能力者（LEVEL5）だが偽って大能力者（LEVEL4）にしている。

「ルールチェンジ」と思うだけでそのことが現実になる。効果範囲は自分から2km。ただし、他人に使用しても効果が無い。他人のいる空間なら使用可能。

超能力と魔術はどちらも使える。

漫画、アニメ、ゲーム、小説等の技は全てノーリスクで使える。

魔力、霊力、気、その他は全部MAX。

完全記憶能力を持っている。

神に何回でもお願いを聴いて貰える。

性格…当麻ほどではないが人が困っていると助けたくなる。

容姿…魔法少女リリカルなのはクロノ（striker時）

## 主人公紹介（後書き）

感想、指摘等はどしどし送って下さい。

第五話 超電磁砲と交換法則（前書き）

スランプです。文がぐだぐだです。矛盾してます……

## 第五話 超電磁砲と交換法則

美琴 side

今日は後輩の黒子が初春飾利さんって人を紹介してくれるらしいんだけど…

黒子「じゃあ改めて紹介いたしますわ。こちら柵川中学一年の初春飾利さんですの」

初「う、初春飾利です。宜しく願います」

黒「それから…」

佐「初春のクラスメートの佐天涙子です。何かわかんないけどついて来ちゃいましたー。因みに能力値はlevel10です」

初「ち、ちよつと佐天さん…」

美「初春さんに佐天さん。私は美坂美琴。宜しく」

佐「よろしく」

初「願います」

黒「それと…」

美・黒「なんであなた（貴方）がここにいるのよ（ん）のですの（？）」

英「いやー。あの御坂さんに会えると聞いて一緒について来ちゃいましたー。エヘッ」

美「そのしゃべり方キモいから止めてちょうだい」

英「まあ、冗談はおいといて、質問なら後で受けるから初春さん達を構ってくれ。俺は今日の主人公じゃないんだからな」

黒「では、つつがなく紹介も済んだところで、多少予定は狂ってしまいました。今日の予定はこの黒子がばっ…」

黒子が狂って来たので殴って黙らせた。

美「まあ、こんなところにも暇だしとりあえず…ゲーセン行こっか」

初「え」

佐「ゲーセンですか…」

美「ほら、黒子いくよ」

そう言っただけで私達は歩き出した。

side out

英樹 side

ふう…後で質問攻めにあうのを引き換えに何とか話を進めることが出来たぜ…。

ゲーセン行く途中で美琴の趣味でクレープ屋に行くことになった。俺らが席を取っていると美琴が沈んでいたが直ぐに治った。確かこの後連続爆破強盗事件とかいうのが起こるんだよね…。と思っていたら初春が気づいた。

初「あれ？あそこの銀行、なんで昼間から防犯シャッター下ろしてあるんでしょう？」

その瞬間銀行の防犯シャッターが爆発で吹き飛んだ。黒子と初春が直ぐに反応した。

黒「初春！アンチスキル警備員への連絡と怪我人の有無の確認。急いでくださいな！」

初「は、はい！」

美「黒子！」

黒「いけませんわお姉様。学園都市の治安維持は私達シャッチメント風紀委員のお仕事。今度こそ見ていて下さいな。それと、貴方もですわよ。」

英「あ、やっぱり？」

そして黒子は犯人達のところに走っていった。確か犯人の一人が佐天さんを蹴るんだったな。うわ、なんか腹立って来た。と思ったらバスのガイドさんみたいな人が男の子を探しに広場から出ようとしていたから

英「じゃあみんなで探しましょう」

と言つて俺、佐天、初春、御坂、ガイドさんで探している。黒子の方は発火能力者との勝負が付いた。すると

不良「な、なんだテメエ。放せよ！」

不味い！そう思った俺は咄嗟に佐天と不良の間にテレポートした。しかしただ移動しただけで防御も何もしていなかった為にそのまま蹴られた。さすがは男子高校生の蹴り。威力はある。

男はちっ、と言いながら車に向かった。確かこの後Uターンして戻つて来るんだよな。あ、美琴がもう道路に立ってる。急がなきゃな。

英「ルール俺は発電能力者エレクトロマスターの超能力者であるチェンジ！」

そう言いながら美琴の元に向かう。

英「俺も入れてくれ」

美「あんたもう大丈夫なの？」

英「ああ。それよりも来たぜ」

車がかつちにUターンして向かってきた。

俺も美琴と反対側を向いて同時にコインを投げた。コインが二人の指に当たった瞬間道路上で二本のオレンジ色の線が車を吹き飛ばす。過剰防衛だが気にしない。そして事件は終わりを告げた。

## 第五話 超電磁砲と交換法則（後書き）

感想、指摘等はどしどし送って下さい。

第六話 河原での闘い（前書き）

遅くなりました。すみません…orz

## 第六話 河原での闘い

英樹 side

どうも、五十嵐英樹です。今は夕方の六時くらいでコンビニに来ていたら当麻がお金を下ろしにきたので影から当麻の不幸を観察しながら電撃姫の登場を待っています。

A 《暗証番号が違います》

当「は？いやそんなはずは」

A 《暗証番号が違います》

当「何でだーっ！っ！」

A 《暗証番号が違います》

当「ああ、もうっ！こうなったら別のコンビニで……っ、ぎゃー！ー！今度はカードが飲み込まれて出て来ない〜〜〜！」

当麻のひとりコントって面白いよな。おっ、美琴が入って来た。

当「不幸だあーっ！！」

美「…久しぶりね」

当麻。美琴が若干引いているぞ…。

当「あーカードが無いと再発行されるまで無一文に。冷蔵庫の中は空っぽだし…。」

美「今日と言う今日は決着をつけてやるんだからっ!!」

そろそろ行くか。

英「どうしたんだ？」

当「あつ！英樹。ATMの暗証番号がわからない上にカードが出て来なくなっただよ。何とかしてくれ」

英「わかったからお前はそこの女子中学生とイチャついてる」

当「ええー！そんな、当麻さんを犠牲にして自分の身を守るって言うことですかー！」

美「わっ、私を置いて勝手に話を進めるなー!!」

そう言いながらATMを叩く姫。因みに電撃付き。

A<sup>ビビッ</sup>

ATMは耐えられなくなったのかカードを吐き出す。

当「おー！カードが出てきた。サンキュービビビリ！」

美「ビビビリじゃなくて御坂美琴っ！」

当「いやー正直なんでこんなのに関わっちゃったんだろっと思って思っ

てたけど今初めてこの出会いに感謝…」

英「その二人。感謝は良いけどあれはどうするの?」

そう言っただけで煙っているATMを指す。

当「な、何か嫌な予感が……」

A《ピーーツ！警告、警告。攻撃性電磁波ヲ関知シマシタ。攻撃性電磁波ヲ関知シマシタ》

当「やっぱりー！」

当麻はそう言いながら俺と美琴を引っ張って出ていく。

当「不幸だああああー！！！」

美「ちょ、ちょっとあんた。どこ行くのよ。待ちなさい！」

さて、追いかけますか。

当麻が逃げてから数十分。俺は河川敷で当麻と美琴を見つけた。

当「じゃあどうすれば終わるんだよ」

美「え？そ…そりゃもちろん………わ、私が勝ったらよ」

当「はああー。仕方ねえな。それで気がすむなら相手になってやるよ。」

美「ようやくやる気になったみたいね」

そして二人は河原に行つて

当「いつでも良いぜ。かかつてきな」

美「言われなくてもこっちはずっとこの時を…待ってたんだからあつ…!」

そう言いながら美琴は電撃を飛ばす。つてヤバイ。誰かが通りかかったら不味くね？よし、魔術使おう。えーと、人払いのルーンは…よし、出来た。これであの二人の闘いをゆっくり見れるぜ。

当「ちよつ…オマエ…エモノ使うのはズルいんじゃないかねえの」

美琴は砂鉄で作った剣を持つ。

美「能力で作ったものだもん。問題なし」

するとどこからともなく一枚の葉っぱが落ちてきて砂鉄剣に触れたとたん半分に切れた。

当「げっ!」

美「砂鉄が振動してチェーンソー見たいになっているから触れるとちよーっと血が出たりするかもね」

当「…ってどう考えてもそれじゃ済まないと思っんですけど…!?!?」  
そついいながらも剣を避ける。俺もただじゃ済まないと思っぞ。美  
琴は剣を振り回し当麻はそれを間一髪で避ける。

美「ちょこまかと逃げ回ったってコイツにはこんな事もできるんだ  
からっ」

そつ言つと剣が伸びる。

当「!?!? 剣が伸び……」

当麻は剣が伸びたことに動揺し、一瞬隙が出来る。

美「(入った? かわせるタイミングじゃ……)」

英「(確かに決まったけど当麻には……)」

そして『パンツ』というなにかが割れる音がして美琴の砂鉄剣は強  
制的に砂鉄に戻される。当麻の右手によって。

美「(強制的に砂鉄に戻された。これも効かないか。でも、ここま  
では予想通り)」

当「しよ、勝負あつたみたいだな」

当麻が強気の発言をする。だが当麻、足が震えているぞ？

美「(砂鉄が消されずに残ってるなら……) さあ、それはどうかしら

「？」

美琴がそう言つたと当麻の近くを漂っていた砂鉄がジリジリと音を出す。

当「オマエっ！？風に乗った砂鉄まで操…ッ」

当麻が喋っている間にも砂鉄が集まっていく。美琴は当麻が砂鉄に意識している間に当麻の後ろに回り込む。

当「こんな事何度やっただって同じ結果じゃねーか！！」

当麻が言いながら砂鉄に右手を伸ばしハンマーの要領で叩く。しかし、右手を出した先には美琴が来ており当麻の腕を握る。

美「（取った！！このまま電流を直に流す。飛んでる電撃は打ち消してもこれならいくらあんだだっ…）」

そのまま一秒経つ。

美「（電流が…流れていかない！！？なんなのよこいつ…！！…っ…つてま…っ！これじゃ反撃が…）」

当「えーと…」

当麻が左手に力を入れてそのまま上げる。それを見て美琴は顔を隠そうとする。

当「……………はー」

当麻はため息をついてから

当「ギャーッ!」

美「????」

叫び声をあげて倒れた。

当「バタッ」……「マイリマシター」

そのまま数秒経過。

美「ふ。ふ。ふざけんなあッ!」

美琴が電撃を放って当麻が回避する。

美「マジメにやんなさいよっ!」

当「だってオマエビビってんじゃないん」

美「なっ!?!?ビビってなんかないわよっ!」

美琴が赤くなりながら言う。

当「うそつけっ!?!?どう見ても涙目になってこんな風に」

当麻が美琴の真似をする。そして美琴のまわりはバチバチと火花が散っている。

当「ビクッしてたら…はっ!」ビクウッ!

当麻は美琴が帯電していることに気づいたらしい。

美「死ねえーっ！」

美琴が電撃を放つ。

当「だああああッ！」

美「逃げんなーッ！！！」

当麻は逃げて美琴が後を追う。

当「オマエっ今っ…今の直撃してたらフツー死ぬぞっ！！！」

美「私だっって今まで人に向けてこんなに能力使ったことないわよっ」

当「なんで俺だけっっ！！？」

美「ちゃんと私の相手をしろーっ！」

当「不幸だーっ！！！」

そう言いながら当麻と美琴は一日中追いかけて回っていたらしい。俺は人払いのルーンを消してから寮に帰った。

第六話 河原での闘い（後書き）

感想、指摘等はどしどし送って下さい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0296x/>

---

とある転生の交換法則(ルールチェンジ)

2011年12月11日19時49分発行